

東京家政学院大学紀要 第四四号 二〇〇四年 人文・社会科学系 抜刷
(二〇〇四年八月発行)

『源氏物語』の世語り

―内大臣と光源氏の相克について―

石 井
井 上
海 眞
音 弓

『源氏物語』の世語り

―内大臣と光源氏の相克について―

石井海音子
*井上眞弓

序

光源氏が須磨・明石から帰京して以降、物語は政治世界が前面にせり出し、光源氏家と内大臣家の相克が、娘の入内という目に見える明確な形として語られている。しかし『源氏物語』は、そうした物語世界の現実を語っているばかりではない。姫君をとりまく女房たちのささめき言・後言や、男達の言葉を取り、真実を感じしようとする女房の感覚が本文に影を落としている。目には見えない「世語り」・人々の噂によつても世の有り様が語られ、その中で政治性が発動されており、「世語り」がもう一つの社会を形成する。この物語は、そのどちらかが描かれ、すくいとることができるのである。

本稿は、噂の生成に対して対照的な内大臣と光源氏の眼差しや耳の確かさ・不確かさをあぶり出すと共に、常夏巻に見られる「世語り」を創り出す場における光源氏の政治力学の有様との関連を論じるものである。特に、内大臣と光源氏の二組の「父と娘」が、「世語り」をめぐって対照的ではあり得なくなっている様を確認する。

1 一般に、政治に携わる家として勢力を拡大・持続させるためには、その家の子供達を持ち駒として息子は後継者にし、娘は後宮に入れる

ことを望んだ。権勢を握る近道は、天皇の外戚となることであった。娘を後宮に入れることが政権掌握の手段であるため、娘に対する求婚者は家の政権に関わってくることから、求婚と政治は結びついていると考えることができる。また、求婚する男性は身近な者や世間の噂から姫君の情報を得るため、求婚と世語りも密接な関係にあると言える。つまり、求婚される側の「父と娘」と、世語りを語る「世間の人々」によつて政治が作られてしまうこともあるのである。この「世間の人々」は、広く一般を指す時であれば、特に上流貴族層だけを意味する場合もあり、その使われ方は一様ではないが、総じて世の常識を代弁する存在と見て良いだろう。

では、この「世語り」は物語内においてどのような意味を持っているのだろうか。

―「世語り」と「人笑へ」

「世語り」とは、世間話や世にある人の上のめづらしきことについて見聞きした事を噂することである。そのため、利用の仕方によっては自分、または他人の身や家の名を操作することも可能になる。『源

氏物語」は、「世語り」を方法として取り込んだ先駆的な作品とされ
ており⁴、物語の本文中に「世語り」の語は七例見られる。内大臣家
に関する「世語り」を見る前に、まず『源氏物語』における「世語り」
の用例を全て挙げて見てみたい⁵。

I (藤壺詠歌) 世がたりに人や伝へんたぐひなく

うき身を醒めぬ夢になしても (若紫一・三〇六)

II 姫君は、かくさすがなる御気色を、「わがみづからのうさぞかし。

親などに知られたてまつり、世の人めきたるさまにて、かやうな
る御心ばへならましかば、などかはいと似げなくもあらまし。人
に似ぬありさまこそ。つひに世語にやならむと、起き臥し思し
なやむ。 (螢三・一九四)

III (源氏) 「さてかかる古事の中に、まろがやうに実法なる痴者の
物語はありや。いみじくけ遠き、ものの姫君も、御心のやうにつ
れなく、そらおぼめきたるは世にあらじな。いざ、たくひなき
物語にして、世に伝へさせん」と、さし寄りて聞こえたまへば、
顔をひき入れて、(玉鬘)「さらずとも、かくめづらかなる事は、
世語にこそはなりはべりぬべかめれ」とのたまへば、

(螢三・二〇五)

IV (源氏) 「…げにこのころめづらしき世語になむ人々もしはべる
なる。…」 (常夏三・二二七)

V かう忍びたまふ御仲らひの事なれど、おのづから、人のをかし
きことに語り伝へつつ、次々に聞き漏らしつつ、あり難き世語
にぞさまめきける。 (真木柱三・三四三)

VI いと重き御心なれば、必ずしも、うちとけ世語にても、人の忍
びて啓しけんことを漏らさせたまはじ、など思す。

(手習六・三五五)

VII (横川の僧都) 「…めづらしき事のさまにもあるを、世語にもし
はべかりしかど、聞こえありてわづらはしかるべきことにもこそ
と、この老人どものとかく申して、この月ごろ音なくてはべりつ
るになむ」と申したまへば… (夢浮橋六・三六三)

以上の七例を見てみると、VIの「うちとけ世語にても」以外の六例
は「めづらしき世語り」の用例である。またVIの用例は、「うちとけ
世語」の場では、軽率な人によって「忍び」の語がつい「漏ら」され
ることもあったことがわかる。「世語り」の場では、めずらしい話
が世間話・噂話として人々の間で交わされ、伝えられていくのである。
語り手の言葉としても、「口さがなきものは世の人なりけり」(行幸三
・三一二)とある。(うわさ)は人に信じられ伝播するもので、その
内容が真実か否かではなく、信じるか否かという点において考えねば
ならない。他人の名を汚したいために悪意をもってわざと流すこと
や、娯楽として、あるいは欲求不満解消として、他とは異なり興味を
抱くに足る情報だとの判断からおもしろがつて流すこともあるだろ
うが、そのような意図が無い場合でも噂をするということは、自分が
得た情報の内容を疑わしく思いながらも、心の中では少なからず信じ
ているということになるのではないだろうか。物語内では、真偽も
様々ではあるが、「世語り」という語で表わされていない場合も含めて、
多くのことが「世語り」として語られている。これらは名を汚す場合
と上げる場合があるため、「世語り」の内容が真実であろうとなかる
うと、とにかく声にのぼせられることが重大事件なのである。物語
内では、名を上げるような「世語り」が無いわけではないが、これら
七例を見てみると、「世語り」という語はそれを意味することを担っ

てはしないと考えることができるのではないだろうか。

また人々は、自分や自分の周りの者についての「世語り」が名を汚しかねないものとして語り伝えられ、そのことよって笑われることを恐れている。例えば、前述したように「世語り」という語で表わされてはいないが、六条御息所は光源氏との関係において「世語り」を恐れている。正妻格であるべき身分であるにも関わらず、年下の恋人である光源氏のつれなさに思い悩み、娘が斎宮となつて伊勢へ下向することになり自分も共に行くことを決める。しかし、

今はとてふり離れ下りたまひなくはいと心細かりぬべく、世の人聞きも人わらへにならんこと
(葵二一一二四)

と、伊勢下向へついていく心細さと共に、世間の物笑いになるであろうことを心配している。ここに見られるように、他人に笑われることを意味するものとして「人笑へ」という語があり、物語内の用例は「人笑はれ」という形も含めると五十八例ある¹⁰。これは「源氏物語」以前の作品の用例数と比べて、作品の長さの差を考慮に入れても際立つ頻用である¹¹。六条御息所の場合、大臣の娘で、前坊との間に斎宮となる娘をもうけた身であり、自分自身の恥と共に家を背負う女君としての自負が「人笑へ」の意識をもたらしていると考えて良いだろう。他にも、女君たちの「人笑へ」意識は多出する¹²。特に、本稿において着目する「人笑へ」意識は、親と子の関係の中で表現された例である。養父である光源氏からの求愛に玉鬘は困惑する。

かうやうの気色漏り出では、いみじう人笑はれに、うき名にもあるべきかな。
(胡蝶三一八三)

このような様子が世間に知られたら、ひどく世間のもの笑いになり評判になってしまうのではないかと玉鬘は恐れている。周りの「うとき

も親しきも」(同)、光源氏と玉鬘は実の親子だと思つていたのである。また玉鬘は、もしも内大臣が自分のことを実の娘として捜し出したとしても、この光源氏とのかつてのことに耳にすると、世間の人々以上に悪く思うのではないかと不安に感じている。これは玉鬘の、養父光源氏と実父内大臣、どちらとの関係においても娘でありながら「父と娘」の枠から逸脱しかねない関係におのく女性の「人笑へ」意識なのである。「人笑へ」という恥の意識は〈家〉の觀念を内在化するもので¹³、親子関係を軸とした「人笑へ」意識に着目した時、物語の第一・二部においての「人笑へ」を氣遣う保護者のな人物は父親の例が最も多く、その内容はすべて娘の結婚問題に関わる事柄である¹⁴。「人笑へ」になることや、「世語り」をされることよつて名を汚されることを恐れる恥の意識は、〈個人〉を含めた〈家〉の問題として危惧されるものである。内大臣家は光源氏家と同様に世間に注目されている家である。世間に注目されていけば、それだけ「世語り」に曝され、物笑いにされる可能性を考え、恐れるのではないか。この点を踏まえた上で、実際に内大臣家に関する「世語り」や、〈家〉を意識して「世語り」をされることを恐れる内大臣について見ていきたい。

二 内大臣家をめぐる「世語り」

一 弘徽殿女御、雲居雁への父の眼差しと耳

内大臣は政治権力の掌握に娘達の存在が必要であり、そのように仕向けたのだが、光源氏家の子供達の存在によつて望みは次々と破られた。これらの出来事の周辺に、内大臣家の「世語り」や、世間の目を気にし、恐れる内大臣の様子が多く見られる。

雲居雁は内大臣にとつて、東宮入内を予定している姫君であった。

しかし、雲居雁と夕霧の恋仲を内大臣が知ったのは、

かかるささめき言をするに、あやしうなりたまひて、御耳とどめたまへば、わが御上をぞ言ふ。「かしこがりたまへど、人の親よ、おのづからおれたる事こそ出で来べかめれ。子を知るはといふは、そらことなめり」などぞつきしろふ。
(少女三・三三三)

という女房達による噂話であった。二人の関係を知った内大臣は、「いと口惜しくあしきことにはあらねど、めづらしげなきあはひに、世人も思ひ言ふべきこと」(同三四)と思い、「人々いかに見はべらんと心おかれにたり」(同三五)、「まことに天の下並ぶ人なき有職にはものせらるめれど、親しきほどにかかるは、人の聞き思ふところもあはつけきやうになむ、何ばかりのほどにもあらぬ仲らひにだにしはべるを、かの人の御ためにも、いとかたはなることなり。(中略)ことさらにもてなし、すこしゆかしげあることをませてこそはべらめ」(同三六)、「さぶらふめる人々も、かつはみなもどき笑ふべかめるものを、いと口惜しく、やすからず思うたまらるるや」(同三七)「よし、しばしかかること漏らさじ。隠れあるまじき事なれど、心をやりて、あらぬ事とだに言ひなれよ」(同三九)と「世語り」を恐れ、敢えて雲居雁から夕霧を遠ざけた。しかし、その後夕霧と他家の娘との縁談話の噂を聞くと、「心弱く進み寄らむも人笑はれに」(梅枝三・四一五)・「心弱くなびきても人わらへなましこと」(同四一八)と娘の身の上を案じつつ自分への「人笑へ」を気にしている。その上、

またとかくあらため思ひかかづらはむほど、人のためも苦しう、わが御方さまにも人笑はれに、おのづから軽々しきことやまじらむ。忍ぶとすれど、内々の事あやまりも、世に漏りにたるべし。とかく紛らはして、なほ負けぬべきなめり (藤裏葉三・四二三)

と思うのである。これらの場面にたまたみ重なるようにして出てくる「人笑われ」「人笑へ」表現に留意したい。

雲居雁と夕霧の恋に関して、内大臣の耳は、女房の後言を聞き得た。そして求婚における娘の、つまり自家への「人笑へ」を阻止すべく、拒んでいた夕霧に対して譲歩する行動に出るのだが、娘をただ「心幼し」と思っている眼差しの不確かさを抱えての行動であり、内大臣の言動は「気付かない父」としてアイロニカルな響きを持つていると読める。

また、冷泉帝が即位した際に内大臣は、弘徽殿女御を入内させた。しかし、後に光源氏の養女である梅壺女御が入内し、秋好中宮となった。弘徽殿女御は、父内大臣の眼から「こまかにをかしげさはなくて、いとあてに澄みたる朝ぼらけおほえて、残り多かりげにほほ笑みたまへるぞ、人にことなりける」と見え、素晴らしいと自負する娘である。しかし、近江の君からの手紙を受け取った場面(常夏三・二四一〜二四二)での弘徽殿女御は、女房達とその手紙のおかしさを笑い、皮肉めいており、ささめき言・後言をする女房と近い距離にある姿が語られている。だが内大臣にはそのような姿が見えない。このように、内大臣の眼差しと耳は、娘をきちんと把握しているとはいえない難い状態であることが判明しよう。

二 近江の君をめぐる「世語り」

しかし、内大臣が世間の目を気にしているのは、入内や立后が叶わなかった雲居雁や弘徽殿女御に関してだけではない。物語内で、しばしば人々に笑われる存在として描かれている、同じく娘の近江の君に

関しても「世語り」をされることを恐れている。以下、その様子を挙げておく。

近江の君が物語内に初めて登場するのは、常夏卷冒頭の座談の場における語りの中であった。内大臣が外腹の娘を捜し出して養女として家に引き取ったことは、世間の人々の珍しい噂話の種になっていた。このことは、篝火卷冒頭部の

このごろ、世の人の言ぐさに、内の大殿の今姫君と、事にふれつ
つ言ひ散らすを、
(三・二四七)

からもわかる。内大臣は、近江の君の姫君らしからぬ言動を見て「人々もあまた見つき、言ひ散らさんこと」(常夏三・二三七)と思つており、それは的中することとなつたのである。また、世の人のみならず「殿の人もゆるさず軽み言ひ、世にもほきたるることと、譏りきこゆ」(常夏三・二二八)のである。「人のいとかたはなるものに言ひおとすなる容貌」(常夏三・二三三)や、「うたてあはつけきやうなり」(同)からも、近江の君の容貌を人がとても見苦しいと悪く言っていることや、ひどくうわついているらしいことを人から聞かされていることがわかる。これが世間の人々による「世語り」であるのか、邸の中の者が噂していることなのか、また柏木などすでに近江の君と対面した子供達から聞いたことなのかはわからないが、近江の君を見た誰かがこのように批評していることや、そのことが内大臣の耳に入っていることは確かである。しかし近江の君自身は自分が「世語り」によって悪く言われ、「人笑へ」にされている存在であることには気付いていない。内大臣が恥ずかしく思ったところで、その言動が改められる様子は無いのである。

三 「人笑へ」の呪縛無き近江の君

近江の君は物語内でしばしば、その逸脱ぶりから人々に笑われる存在として描かれている。言葉遣いの特徴として、同語の繰り返しや女性らしからぬ言葉の多用、はっきりとした物言いなどが挙げられる。また、言葉遣いだけではなく声や話し方にも特徴がある。「いと舌疾きや」「例のいと舌疾にて」「この舌疾さ」「口疾く」(以上常夏)は、早口な様子を表しており、「舌疾」は、物語内では四例見られるが、そのうち三例が近江の君の喋り方を示している。早口な様子を見た内大臣は「あな、うたて、と思し」、「このものたまふ声を、すこしのどめて聞かせたまへ」(共に常夏)と言っている。近江の君の喋り方は、深みが欠けて軽薄で、訛りもある。また、近江の君は尚侍になることを望んでいる。尚侍は、低い家柄や斜陽王統から出た女たちが宮仕への臍を積んだ果てに年老いて辿り着く最高の地位¹⁶であり、近江の君が尚侍を望むこと自体は間違っていないようである。しかし問題なのは、そのことを口に出していることなのである。

行動についても、端近で簾を体で張り出して双六遊びをするなど、姫君としてはふさわしいものではない。他にも、「遊び」や「怒り」など、まるで子供のような様子も見られる。子ども、或いは老人は概ね性を越えた、もしくは性的役割から解き放たれた存在¹⁷であり、やはりこれも姫君らしからぬ様子を示しているであろう。先に考察した「人笑へ」を恐れる女君という規範は、近江の君には見出せない。つまり、近江の君は「人笑へ」を忌避する女君の心性を持っていないことから、「世語り」の場に引き出される可能性を十分に持っているということになるのである。

近江の君は、母親不在なうえに優れた乳母や女房もおらず、姫君教

育を行うはずの父親にまでその管理を放棄されている。この、近江の君の管理をしないという内大臣の行ないが、貴族社会の姫君の規範からの逸脱を更に招いてしまっているのではないだろうか。「世語り」をされる近江の君の端緒は、内大臣家という〈家〉の問題に帰結してしよう。

四 内大臣家の姫君としての近江の君

しかし物語は、姫君らしからぬ近江の君を描く一方で、「内大臣家の姫君」である側面も語りとる。内大臣自身、近江の君の容貌は、「他人とあらがふべくもあらず」（常夏三・二三四）と、自分と相似と思っ
ている。他にも近江の君が内大臣家の姫君として捉えられていることが窺える場面がある。常夏巻の、弘徽殿女御方との手紙の遣り取りの場面である。

近江の君は、弘徽殿女御に宛てた手紙に撫子の花をつけている。撫子の花は物語内では玉鬘の喩えとして使われており、内大臣が娘達の立后や入内の夢が破れた際に、次の持ち駒として夕顔との間の娘の存在を思っている表現にも、「かの撫子」（蜚三・二一〇）とあった。そして捜し出した結果、常夏巻で内大臣家に引き取られたのは、本当に捜していた玉鬘ではなく近江の君であった。「常夏」とは撫子の別称である。近江の君が初めて物語内にその姿を現わした「常夏」巻において手紙を「撫子」の花に付けているのは、近江の君の意識とは別のところで、物語が読み手に対して内大臣家の姫君であることを語っているのではないだろうか。

また、弘徽殿女御の女房の中納言の君は近江の君の手紙を横目で見て、「いと今めかしき御文の気色にもはべめるかな」（三・二四一）と

言っている。光源氏を「今めかし」とする表現は少なく、内容的にも重要と思われるものはなく、光源氏自身も自分のことを今めかしくないと言っており、むしろ古いものを良しとする考えが見られる。また、内大臣家は父左大臣と同様に子供の数が多く、そのこと自体が景気がよくて「今めかし」いのである¹⁸。物語内には、内大臣家に関する

「今めかし」として、絵合巻の梅壺方と弘徽殿女御方の絵合わせの際に、内大臣が用意した絵や調度品に対しても用いられている。物語内では、光源氏よりも内大臣の方が「今めかし」く、その娘である近江の君の手紙も中納言の君の言葉を通して「今めかし」と表現されているのである。また、弘徽殿女御方から返事をもらった近江の君は、対面に備えて「いとあまえたる薰物の香を、かへすがへすたきしめ」、「紅といふもの、いと赤らにかいつけて、髪梳りつくるひ」（共に常夏三・二四二・二四三）ている。この化粧をしている様子も、過剰さによって逸脱してはいるものの、はつきりとした形へのこだわりや、はなやかさという点での「今めかし」さを示しているのではないだろうか。こうして、「今めかし」という内大臣家を象徴する美が、とりたてて近江の君にも用いられている。そして、弘徽殿女御方から中納言の代筆によって出された返事を受け取った場面で、その手紙を読む近江の君は、語り手によって「御方」と呼ばれており¹⁹、女房などではなく、内大臣家の姫君であることが語られるのである。

物語内で近江の君は、貴族の姫君から逸脱し、人々に笑われる存在として描かれる一方で、内大臣家の姫君としても描かれている。つまり近江の君の「人笑へ」は内大臣の「人笑へ」であり、近江の君を笑う「世語り」は、内大臣や内大臣家が世間の人々に笑われるということに結びつくのである。

三 「常夏」巻の座談の場

一 光源氏の創り出す「世語り」の場

娘をめぐる「世語り」は父親の「人笑へ」意識とされ、また父を笑いとることに通じる様を見てきたが、「世語り」が政治性を伴うものであることについて考察していく。そこで、常夏巻冒頭の座談の場に着眼し、この場がどのように生成されているのかということに明らかにしていきたい。

【常夏巻】

④いと暑き日、東の釣殿に出でたまひて涼みたまふ。中将の君もさぶらひたまふ。親しき殿上人あまたさぶらひて、西川より奉れる鮎、近き川のいしぶしやうのもの、御前にて調べてまゐらす。例の、大殿の君達、中将の御あたり尋ねて参りたまへり。(光源氏)「さうさうしくねぶたかりつる。をりよくものしたまへるかな」とて、大御酒まゐり、水水召して、水飯などとりどりにさうどきつつ食ふ。(常夏三・二二五)

⑤(光源氏)「水の上無徳なる今日の暑かはしさかな。無礼の罪はゆるされなむや」とて、寄り臥したまへり。(光源氏)「いとかかるころは、遊びなどもすさまじく、さすがに暮らし難きこそ苦しけれ。宮仕する若き人々たへ難からむな。帯も解かぬほどよ。ここにてだにうち乱れ、このごろ世にあらむ事の、すこしめづらしく、ねぶたさ醒めぬべからむ、語りて聞かせたまへ。何となく翁びたる心地して、世間の事もおぼつかなしや」などのたまへど、めづらしき事とて、うち出できこえむ物語もおぼえねば、かしこまりたるやうにて、みないと涼しき高欄に、背中押しつつさぶらひたまふ。(同二二五)

◎(光源氏)「いかで聞きしことぞや、大臣の外腹のむすめ尋ね出

でてかしづきたまふなる、とまねぶ人ありしは、まことにや」と、弁少将に問ひたまへば、(弁少将)「ことごとしく、さまで言ひなすべき事にもはべらざりけるを。この春のころほひ、夢語したまひけるを、ほの聞き伝へはべりける女の、我なむかこつべきことあると、名のり出ではべりけるを、中将の朝臣なむ聞きつけて、まことにさやうに触ればひぬべき証やあると、尋ねとぶらひはべりける。くはしきさまはえ知りはべらず。げにこのごろめづらしき世語になむ人々もしはべるなる。かやうのことこそ、人のため、おのづから家損なるわざにはべりけれ」と聞きゆ。(光源氏は)「まことなりけり、と思し」(同二二六)

この座談の場は、世間の噂が語られている「世語り」の場であり、この場を創り出し、支配しているのは実は光源氏なのである。

この場に参加していたのは息子の世代、つまり光源氏よりも下の世代である。そして、光源氏が「無礼の罪はゆるされなむや」と言つて寄り臥していることから、この場は光源氏が親しい者たちに酒と食事を用意して、身分や地位の上下を超えて楽しもうとした無礼講の場であり、それは平素話にくい事柄などを言つたり聞いたりすることが可能になる、きわめて祝祭的な場で、人々から自分の知らない情報を聞こうとしているのである²⁰との論もある。しかし、ここで用意されている鮎が、夏に帝のもとへ献上されるものが六条院の光源氏のもとへも献上されているということから、すでに光源氏の支配のもとにある場であると言える。そして若き人々も皆、「かしこまりたるやうに」いるのである。また、ここで光源氏は弁少将と藤侍従を歓迎し(④の傍線部)、何か目の醒めるような話を聞かせて欲しいと言つてい

る(㊦の傍線部)。ここで語られる話は内大臣家についての噂話なのであるが、㊣の傍線部からもわかるように光源氏によって会話のきっかけが与えられているのである。

さらに、めずらしい最近の「世語り」を「語りて聞かせたまへ」(㊦傍線部)と言い、最後まで「かく聞きたまふにつけても」(三・二二八)と、あくまでも話を「聞く」という姿勢をとっていないながらも、光源氏以外で言葉を発した様子が明確に語られているのは弁少将のみで、しかもそれは光源氏に問われたことに対して返事をしたものである。このような語りの型や、「心やすくうち休み涼まむや。やうやうかやうの中には厭はれぬべき齢にもなりにけりや」(三・二一九)という光源氏の言葉によってこの場が終わり、座談の始まりと終わりのきっかけを与えるのは、共に光源氏の言葉であったことから、この座談の場が、光源氏が自らの意思で創り出した場で、それは、内大臣の息子に対して内大臣家に関する「世語り」について問いかけて、自分の得た情報の真相を確かめるためのみならず、さらにこの座談の場に居合わせた者たちによって広められる噂を創り出した場であったとも言えよう。

この場面は物語の構造上、雨夜の品定めにおける座談の場が響いていると思われる。

【帚木巻】

①長雨晴れ間なきころ、内裏の御物忌さしつづきて、いとど長居さぶらひたまふを、大殿にはおぼつかなくうらめしく思したれど、よろづの御よそひ、何くれとめづらしきさまに調じ出でたまひつつ、御むすこの君たち、ただこの御宿直所に宮仕をつとめたまふ。宮腹の中將は、中に親しく馴れきこえたまひて、遊び戯

れをも人よりは心やすくなれなれしくふるまひたり。

(帚木一・一三〇)

②つれづれと降り暮らして、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさをさ人少なに、御宿直所も例よりはのどやかなる心地するに、大殿油近くて、書どもなど見たまふ。近き御厨子なるいろいろの紙なる文どもを引き出でて、

(同・一三一)

③左馬頭、藤式部丞御物忌に籠らむとて参れり。世のすき者にて、ものよく言ひとほれるを、中將待ちとりて、

(同・一三四)

常夏巻に対し帚木巻での座談の場は、宮中で行なわれ、参加しているのは光源氏と同じ、若しくは上の世代の者であった。光源氏の様子も、左馬頭・頭中將・藤式部丞の三人が体験談を話している最中、初めのうちはからかって笑うこともあったが、後に「うちねぶりて、言葉ませたまはぬ」ようになるのである。左馬頭の話に「うなづ」き、「心入れてあへしらひぬたま」い、「いみじく信じて、頬杖をつきて、向ひぬたま」い、「言ひはやしたまふ」のは全て頭中將であった。また、この場に訪れた左馬頭と藤式部丞に対して歓迎の態度を示したのも、頭中將であった。そしてこの場が終わる明確なきっかけは無く、女性論について決着をすることもなく、時間の経過によって夜が明けて曖昧なまま終わったのである。

さらに本稿は、常夏巻の座談の場は、帚木巻の雨夜の品定めを構造的に反復しつつ、ずらしたものと把握する。帚木巻では、光源氏が年上の男性達による女性論を聞いていた。しかし常夏巻では座談の場の後に、玉鬘を相手に和琴を媒体として女性論を語っている。そのことにより、「世語り」の場を創り出した光源氏が、「父と娘」に関わる政治性が前面にありながら、「良き女」を評論する位置を据えなおされ

る契機を帯びていることを読み手は知ることができ、また、常夏巻に
おいてすでに父親の世代であるにも関わらず、玉鬘への懸想という、
父親像だけではない光源氏を見るのである。しかし、帚木巻の若き日
の姿を引きつつも、座談の場で「翁びたる」や「厭はれぬべき齡」と
いう老いを指す言葉を発話してしまったことよって、それが本心で
はなかったとしても、その事実を物語に刻みつけてしまい、これらの
言葉はアイロニカルに後の物語を導くことになるう。

二 座談の場の「世語り」

姫君らしからぬ女性である近江の君を家に迎え入れてしまったこと
は、内大臣の恐れる「世語り」の恰好の材料となり得る。しかし、そ
のような近江の君の人物像が描かれるのは座談の場以降のことであっ
た。光源氏は内大臣の息子の弁少将に、

いかで聞きしことぞや、大臣の外腹のむすめ尋ね出でてかしづき
たまふなる、とまねぶ人ありしは、まことにや（常夏三・二六）
と問い、それに対して弁少将は

げにこのごろめづらしき世語になむ人々もしはべるなる。かやう
のことこそ、人のため、おのづから家損なるわざにはべりけれ

（同二二七）

と答えている。これを聞いた光源氏は、「まことなりけり」と思う。
では、この場での「世語り」は一体何であったか。再考してみたい。

『岷江入楚』²¹では、「近江君のをかしきさまをいふ也」としている。
しかし、光源氏が「大臣の外腹のむすめ尋ね出でてかしづきたまふ」
という噂を聞いたのは、近江の君がどのような女性であるのかわかっ
ていない時点であり、後にその実態が明らかになっていくに従って、

近江君は「人笑へ」となり、さらに内大臣が、「人笑へ」になつてい
くのであり、よく調べもせず外腹の娘まで捜し出そうとする内大臣
の姿こそ、「家損なるわざ」で、「世語り」に晒されているのは近江君
ではない²²のである。

この場で光源氏が確かめたいと思ひ、内大臣の息子に問いかけたの
は、内大臣が外腹の娘を捜し出して大切にしていることが、事実であ
るのかというものであった。近江の君が劣り腹であるということが語
られているのであつて、近江の君の人物像や、そのことを笑う「世語
り」が明確に語られているわけではない。しかし読み手は、弁少将の
言葉から近江の君を家に引き取ったことが「めづらしき世語り」で「家
損なるわざ」である、という情報を得て物語を読み進めていく。そし
て次々と近江の君の姫君らしからぬ言動や、そのことを笑う「世語り」
が実際に物語内で流れていることを知る。つまり光源氏は、この「世
語り」の場での弁少将の生真面目な「発話」によつて、またこの時点
では語られていなかった近江の君を笑う「世語り」を物語内に引き出
してしまつたのである。

世間の目を気にする内大臣は近江の君を「をこの者」に仕立ててし
まおうと考えるが、内大臣の近江の君に対する扱いは、行幸巻におい
て「世人は、恥ぢがてら、はしたなめたまふ」など、さまざま言ひ
けり（三・三二六）と批判されてしまう。近江の君をからかう場面
での内大臣の描写には、「をこめいたる大臣にて」（常夏三・二二六）
や「をこ言にのたまひなす」（同二三七）という表現が見られるが、
実は、「めづらしき世語り」として世間の人々に語られるような娘を
捜し出してしまつた内大臣自身が笑われる対象となつてしまふので
ある。光源氏に問われて「家損なるわざ」を語つたのは内大臣家の息

子の弁少将であった。そしてその話題となった近江の君を（家）のこととして動き、捜し出したのは、内大臣家長男の柏木であった。物語は、近江の君だけでなく内大臣をも「をこ者」として描いているのである。光源氏は、弁少将の答えによって、自分の持っている情報がやはり正しかったと確認する。光源氏の「なまねたしとも漏り聞きたまへかし」（三・二二八）という心中思惟は、この座談の場で語られている内容が語り伝えられることを想定しているのではないか。実際、後に内大臣は弁少将からこの座談の場でのことを聞いている。内大臣は近江の君がすでに「世語り」にされていることは知っており、そこへ、その「世語り」を光源氏も耳にしてるという事実を聞かされた。自らが創り出して支配する「世語り」の場において弁少将に対して情報の真偽を問うという行為によって、その情報に乗じて内大臣家への攻撃を行なっているのである。

また、光源氏のもとに情報は集まるが、そこから流れることはない点も、光源氏の優位性を表しているだろう。玉鬘の実父が内大臣であるという情報は世間に流れてはならず、内大臣は「人々しきほどならば、年ごろ聞こえなまし。（中略）その今姫君は、ようせずは、実の御子にもあらじかし」（常夏三・二二八）と推測はするものの、自分の実の娘であったという事実は行幸巻で光源氏から聞かされて初めて知った。情報の獲得如何と、事実が気付く・気付かないという父親として対照的な二人を読み取ることができよう。こうしたことから、「世語り」が政治性を持ち、光源氏家と内大臣家の対立という政治的レベルにおいて、〈言葉〉の力によっても内大臣が光源氏に負けていくことが明らかとなる。

結

常夏巻座談の場における光源氏の〈言葉〉は、自分のもとに集まった情報の確認をするための場を、自ら創り出す手段となった。物語内で流通している近江の君像は、世間のみならず自家の者にも笑われるような「をこ者」であった。しかし、近江の君自身はそのことには気付いていない。内大臣は世間の目を気にし、「世語り」をされることを恐れているが、物語内には近江の君を笑う「世語り」は流れている。そのことにより、近江の君を引きとってしまった内大臣までもが「をこ者」に仕立てられてしまう。一方光源氏は、養女として迎え入れられた玉鬘に対する世間の評判は高く、求婚者も多く現われる。「世語り」によって、光源氏家の優位性が語られているのである。

しかし、梅壺女御の立后などの目に見える形としての政治的な勝敗は光源氏の圧倒的な優位に見えるが、その一方で、「世語り」に圍繞されていく光源氏の様子も物語は描いている。内大臣が「世語り」を恐れていたのと同様に、光源氏もまた、「世語り」を気にし、行動を規制せざるを得なくなっている。玉鬘との関係において、「渡りたまふことも、あまりうちしきり、人の見たてまつり咎むべきほどは、心の鬼に思しとどめて」（常夏三・二二五）、「心のままにもあらば、世の人の譏り言はむこと」（同二二六）と思っている。しかし、そうしているうちに玉鬘は髭黒大将に奪われる。「世語り」を気にしている求婚者としての光源氏の「をこ者」ぶりも、読み手は見ることができるのである。

『源氏物語』は、見聞きする女房の眼差しや耳を「世語り」や「人笑へ」という言葉に内包させて、家々の相克を語っている。そして男達はそれらの政治性の中で、女房の眼差しや耳を利用し、かつ恐れる

のである。

常夏巻は、光源氏が養女玉鬘との関係において「世語り」を気にしなくてはならなくなる転換点の巻ではないだろうか。そして「世語り」の政治性を語ることで、相克している内大臣と光源氏が、「世語り」を恐れるという点において同質性を帯びてくることを、アイロニカルに語っている巻と言えよう。

注

- 1 村田裕子『源氏物語』に於ける親子関係（山口女子大国文3号 81年 11月）
- 2 秋澤互「四位になしてん」考（国学院雑誌第104巻 第5号 03年）
- 3 神野志隆光「源氏物語における「世語り」の場をめぐって」（むらさき11年6月）
- 4 石井正巳『源氏物語』の世間話（『絵と語りから物語を読む』大修館書店 97年9月）『和泉式部日記』に、「はかもなき夢をだに見て明かしては何をかのちの夜がたりにせむ」という歌があり、この場合の「よがたり」は「夜語り」説が一般的であるが、掛詞ととっても良いかと思う。
- 5 本稿中の本文引用は全て、小学館 日本古典文学全集による。
- 6 4に同じ
- 7 安藤徹「物語と（うわさ）・浮舟をめぐる（うわさ）から」（日本文学43・2 94年2月）
- 8 安藤徹「世」の中の六条院・『源氏物語』における物語社会の現実感」（『龍谷大学論集485号 01年7月』）
- 9 橋本ゆかり「噂と会話の力学・源氏物語をおしひらくもの」（東京女子大学日本文学82 94年9月）
- 10 北川久美子『源氏物語』における「人笑へ」・「名」「世語り」と「人笑へ」
- 11 この関係を中心に」（『清心語文3 01年8月』）
- 12 藤壺の
かかること絶えずは、いとどしき世に、うき名さへ漏り出でなむ（中略）
必ず人笑へなる事ありぬべき身こそあれ（賢木二・一〇六）
明石の君の
よろづのことかひなき身にたくへきこえては、げに生ひ先もいとほしかる
いべくおぼえはべるを、立ちまじりてもいかに人笑へにや
紫の上の
今はさりとて、とのみわが身を思ひあがり、うらなくて過ぐしける世の、
人わらへならん（若菜上四・四八）
など。
- 13 日向一雅「源氏物語の『恥』をめぐって」（日本文学26 77年9月）
- 14 朝日眞美子「源氏物語の「人笑へ」の諸相・親子関係を軸として」（国語国文学21 99年12月）
- 15 内大臣は雲居雁に対して「幼き人々の心」（少女三・三七）、「心幼くものしたまひける」（同三八）など幼さを見ているが、雲居雁はすでに女君として恋をしており、ここに内大臣の眼差しの不確かさが確認できる。
- 16 後藤祥子「尚侍放」（日本女子大学国語国文学論究1 67年6月）
- 17 原岡文子『源氏物語』の子ども・性・文化（『源氏物語研究』1 翰林書房96年4月）
- 18 池田節子「いまめかし」考・玉鬘十帖の光源氏」（『新物語研究3 95年 11月』）

19

物語内の「御方」以外の近江の君に対する呼称を見てみると、「外腹のむすめ」「女」「今の御むすめ」「北の対の今君」「御方」(以上常夏)「内の大殿の今姫君」(篝火)「不調なるむすめ」(野分)「さがな者の君」(行幸)「近江の君」(行幸・真木柱)「尚侍のぞみし君」(真木柱)「到仕の大殿の近江の君」(若菜下)となっている。

20
4に同じ

21 中野幸一・編 『源氏物語古註釈叢刊 第七卷』(武蔵野書院 86年5月)

この意見と同様、『源氏物語評釈』(角川書店 65年12月)において玉上琢也氏は、「世間の人々のもっぱらの評判となつてゐる女」で、光源氏は近江の君に関して相当のことを聞いていたのではないかと類推している。また、三田村雅子氏は、近江の君を「世語り」の被害者として取り上げ、夏の夕涼みの釣り殿の上の他愛ない世間話の場という設定ながら、光源氏が、近江の君を笑う「世語り」に加わつて、その滑稽なる振る舞いをあれこれ話題にすることは、内大臣を非難する世論に組していることを間接的に示すものであると述べている。(三田村雅子「源氏物語の世語り・「他者」の言葉・「他者」の空間」、『源氏物語講座』6巻 勉誠社 92年8月)

22
10に同じ

付記・本稿は、平成十四年度に修士論文として東京家政学院大学に提出したものの一部に、加筆・修正したものである。

大学院人間生活学研究科修了

* 人文学部日本文化学科